

法勝寺八角九重塔跡発掘調査現地説明会資料

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2010年6月26日

所在地：京都市左京区岡崎法勝寺町（京都市動物園内）

調査面積：約380㎡

調査期間：2010年5月17日～2010年7月12日（予定）

調査機関：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

調査の概要

今回の調査は、京都市動物園の敷地内で実施しています。京都市動物園は、平安時代後期に白河天皇によって造営された法勝寺の南半部にあたります。調査地は、古くから「塔の壇」と呼ばれ、戦前まで直径約30m、高さ約1.5mの高まりが残っており、法勝寺の八角九重塔跡と推定されていました。平成21年度に実施された京都市文化財保護課による試掘調査で、塔の掘り込み地業の一部が見つかりました。その結果を受けて今回、塔の正確な位置と規模、地下構造の解明、さらに池の中島に建てられた塔の周囲にめぐる園池の様相を把握することを目的とした確認調査を行っています。

見つかった遺構と遺物

地業1 1区・2区では、試掘調査で見つかった塔の掘り込み地業跡を確認しました。掘り込み地業とは、建物の基壇の下を掘り下げて土を入れ替え固めた一種の地盤改良です。平面形は八角形で、5箇所のコーナー部を検出しました。1辺の長さは約12.5mから14.5mあり、東西幅は約32m、総面積は約850㎡と推測されます。深さは検出面から約1.5mあり、黄橙色の粘土に径40～70cmの河原石を混ぜて固めています。上半部は、純粋な粘土と砂利を混ぜた粘土を交互に水平に積んで固めた版築を行っています。

地業2 1区では、もう一つの掘り込み地業跡が見つかりました。幅約3mで、地業1の外側をめぐる。深さは約1.5mあります。土に径30～70cmの河原石やチャート混ぜ、上部は赤褐色の粘土で固めています。

凝灰岩列 地業1の東面で、凝灰岩の切石が敷かれた状態で見つかりました。上部は削られています。5石が確認でき、他にも痕跡が認められます。切石は正方形で1辺約30cm、厚さ10～12cmあります。

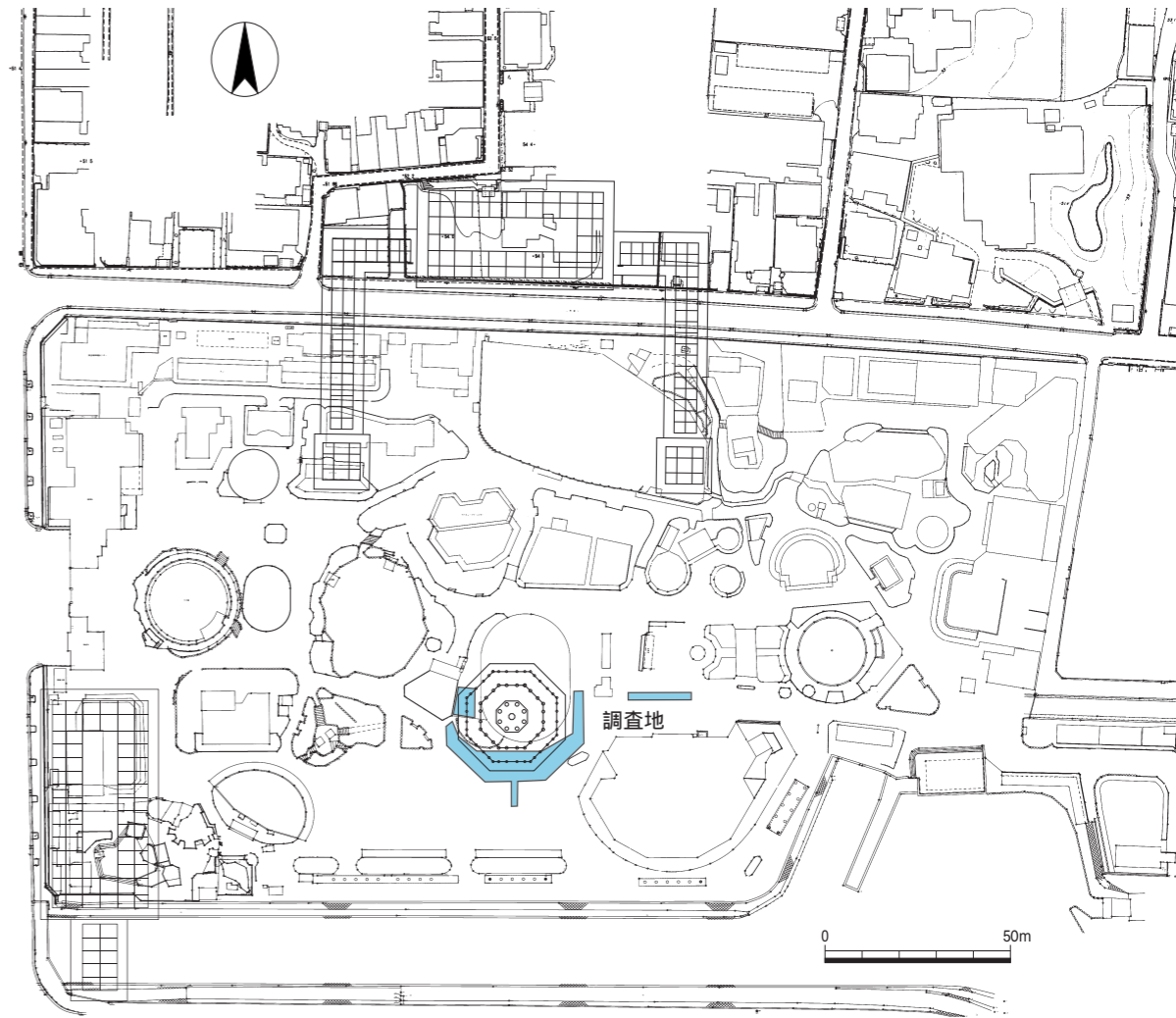
土坑1 1区の南東部で見つかった土坑です。不整形な土坑で、焼けた瓦や凝灰岩の破片が多数出土しました。塔廃絶後の廃棄物処理した土坑と考えられます。

池跡 3区では西から東に傾斜する池跡を確認しました。池を埋め立てた土からは、軒瓦や鬼瓦のほか、表面が焼けた凝灰岩の切石などが出土しました。

遺構の性格と位置付け

今回の調査で、塔の地業のほぼ正確な範囲が判明し、戦前まで残存していた「塔の壇」の大きさと合わせると、八角九重塔が巨大な建築物であったことが明らかとなりました。河原石と粘土を用いた掘り込み地業は、各所で見つかっていますが、今回見つかった地業1のように巨大な石を使用した例は他にありません。塔の周辺は白川の扇状地で、砂が厚く堆積する元来地盤の不安定な場所である上、周囲が池に囲まれており、強固な地盤改良を必要とした結果生み出された工法と考えられます。さらに、八角九重という形態としては、日本で建造された唯一の塔であり、当時の最高の土木・建築技術を結集して建築されたと考えられ、白河天皇の権力の強大さを物語る極めて重要な遺跡であるとともに、土木・建築史を研究する上でも重要な発見と言えます。

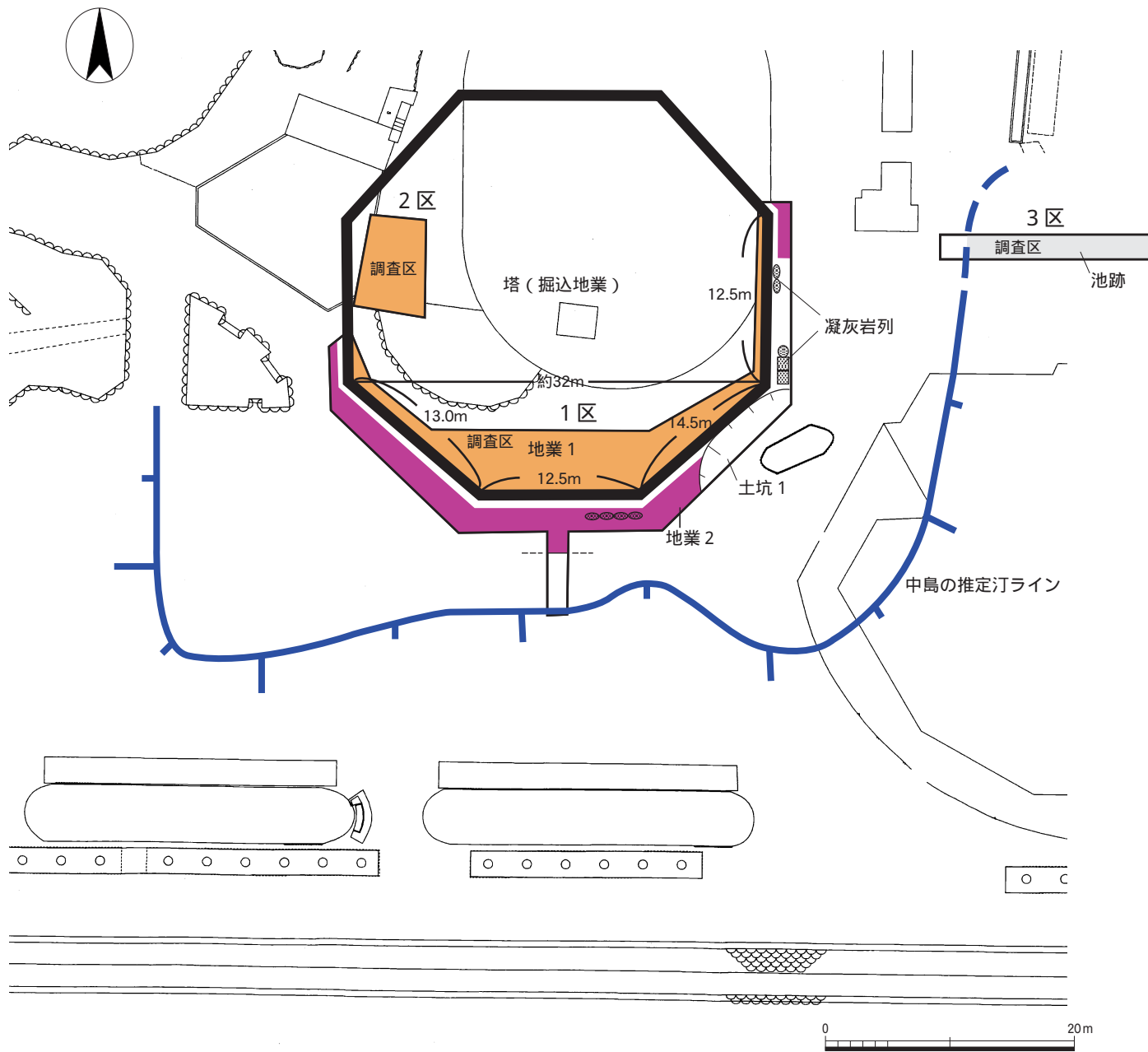
また、周囲にめぐる地業2は、地業1とは使用する石や粘土の種類が異なり、瓦や凝灰岩片が混じることから、地業1より遅れて成立したと考えられます。修復や再建時に、地盤をより強固にするために施された可能性があります。1区東側で見つかった凝灰岩列は面を揃えて据えられており、塔に取り付く階段の周囲に敷かれていたと考えられます。また、塔の周囲からは平安時代から鎌倉時代の瓦が多数出土し、塔には瓦が葺かれていたことがわかりました。こうした塔の修復・再建の様相や、外観を復元するための資料が得られたことも大きな成果と言えます。



法勝寺の歴史

法勝寺は、平安時代後期に白河天皇の御願寺として創建されました。その選地については、藤原氏代々の別業であった白河院を左大臣藤原師実が天皇に献上したこと、白河の地が平安京と東海道・東山道を結ぶ交通の要衝であり、政治的にも重要な場所であったことが上げられます。法勝寺の造営を機に、白河の地割が整備され、次々と天皇や后により寺院や院御所が建てられました。寺院にはいずれも「勝」の字が付くことから総称して「六勝寺」と呼ばれています。法勝寺の造営は承保2年（1075）に始まり、承暦元年（1077）には金堂・講堂・阿弥陀堂・南大門・西大門・築地など主要な伽藍の落慶供養が行われています。やや遅れて、永保元年（1081）には塔の造営がはじまり、永保3年（1083）には塔の落慶供養が行われています。

塔は金堂の南の池の中島の上に建てられ、八角九重、高さは二十七丈（約81m）あったとの記録があります。法勝寺の寺域は確定していませんが、東西2町（約240m）、南北4町（約480m）あったとも言われ、広大な寺域と巨大な金堂・塔を擁し、その造営は、白河天皇の権力を示し、院政の開始を告げる一大事業であったと考えられます。法勝寺のシンボルである八角九重塔は、その高さから度々地震や落雷の被害に遭い、その度に修理が施されましたが、承元2年（1208）には落雷により焼失します。建保元年（1213）に再建されますが、暦応5年（1342）に再び火災により焼失し、その後再建されることはありませんでした。法勝寺もそれ以後衰退し、応仁・文明の乱後に廃絶したと考えられています。



調査区配置図



南東から見た白河六勝寺の伽藍俯瞰図（右手前は法勝寺）作画：梶川敏夫